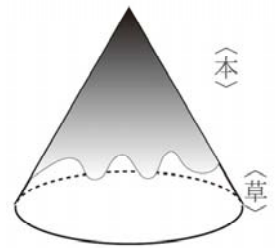


## 第6回 和本の楽しみ方4 江戸の草紙

はしぐち 橋口  
こうのすけ 侯之介



### 江戸の〈本〉と〈草〉

江戸時代に入ると、まず活字の技術が入ってきて、大名や寺院などが出版をてがけた。やがて、木版でも優れた印刷本ができることが再認識され、商人による出版が京都で始まる。商業印刷の開始でもある。そこでは〈本〉のジャンルに入る儒学や歴史書・医学・仏教などの専門書が盛んにつくられ「物之本」と呼ばれた。仮名でかかれた書き下ろしの小説も刊行された。これを仮名草子という。

さらにもう一段低いものとして〈草〉の側の店もできる。それを草紙屋といった。それが大衆向けの市場を開拓した。

### 中世の語り物が文字になる

江戸時代になると中世的な流浪の芸能はしだいに定住化する。それにつれて劇場での演劇が盛んになるが、それでも草紙と演劇は深い関係にあった。

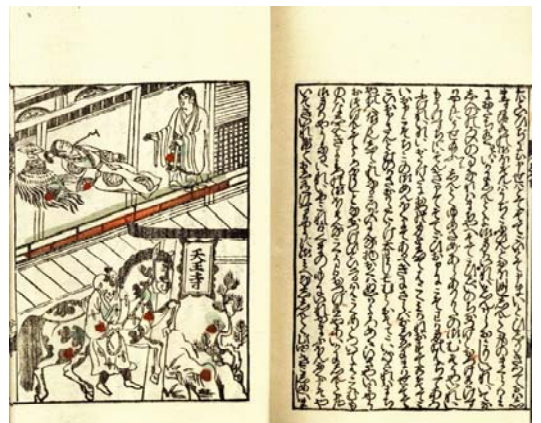
読みやすい文字に挿絵を入れた本が江戸時代にたくさんできるようになって、お伽草子、説経節、舞の本など中世の物語は江戸時代でも人気があった。

### 浄瑠璃本から始まった

17世紀の始め=近世初期、語り物の芸の中から三味線を取り入れ、さらに流行しだした操り人形芝居の方法と結びつけて浄瑠璃が始まったとされる(右図)。題材を中世の人気作品にとり、庶民の人気を集めた。能は上級武士のものなので大衆化はしなかった。



江戸時代前期の浄瑠璃は多くが、六段構成になっていたのので、そのセリフや語りを取めた絵入本(正本という)を六段本(右図)といった。演劇とセットになって本が発売された。また、力持ちの主人公である坂田金時の子・金平きんぺいにちなんで、金平本ともいわれた。

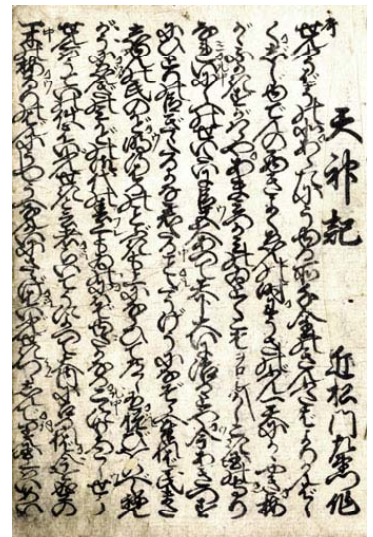


### 演劇と本の分離

17世紀後半の貞享年間になると、竹本義太夫が始めた語り口調に変わり、以後、この義太夫節が主流となり、演目も大人向けの現代劇になっていく。とくに近松門左衛門による書き下ろしの作品が人気を集めた。従来の語り物から「ドラマ性」のはっきりした演劇へ転換させたといわれる。近松以前を「古浄瑠璃」と呼んで区別している。

一方、女優中心の女歌舞伎で始まった歌舞伎は、風俗を乱すという理由で禁止され、以後、男だけの芝居になった。人気が出てくるのは元禄頃からで、近松などの演目を取り入れて、まず上方（京大坂）で広がる。すぐに江戸でも人気を博し、江戸時代の後半は、浄瑠璃と並んで二大演劇となった。→近松門左衛門の作品 独特の書体 赤穂浪士の吉良討ち入りを題材にした忠臣蔵は、時代を室町時代初期にとって「仮名手本忠臣蔵」として浄瑠璃の演目として創作されたが、江戸では歌舞伎が取り入れ、以後、最大の人気作品となった。

近松の登場は、中世の影響を離れ近世独自の文学が芽生えたことを示していた。小説の分野で井原西鶴、和歌とは別の境地で短く表現する俳諧では芭蕉の登場と、江戸時代独自の文化が書籍を通して表現するようになった。ここで演劇と書物はそれぞれの独自性を一層発展させる方向に進み、中世とは位相を変える。



### 草紙屋の活動

十七世紀の草紙屋は浄瑠璃と結びつき、その正本を出すことで発展した。上方の草紙屋は近松以後になると正本発行の権利を独占した。

それに対して、江戸の草紙屋は地本屋じほんなりわいと称して、初めは上方本の焼き直しを江戸の地で売ることを生業なりわいにしていた。

しだいに独自路線を歩み始め、とくに中本サイズしやれぼん（一般的な物之本の半分のサイズ。今のB6判）の大衆本を安く大量に販売するようになる。当初は子供向けの赤本、少年向けの黒本で、題材はまだ中世の語り物の影響が強かったが、江戸時代の中頃（18世紀中頃を中心とした時期）になると、書き下ろしの大人向け作品が主流になる。

同時に吉原などの「いき」な遊びを小説にした洒落本しやれぼんもできていて、笑い=滑稽や「いき」が書物のテーマになっていた。



### 娯楽としての草紙

その江戸の地で独自の書き下ろし文芸作品の場となったのは、黄表紙きびょうしという分野である。

表紙はキハダで染めた粗末な薄緑色のもので当時は「青本」とっていた。本文の用紙もどこか薄ねずみ色をしていて、真っ白ではない。リサイクルの漉き返しという紙だからだ。

その中で 1775 年（安永 4）に出た恋川春町（こいかわはるまち）作『金々先生栄花夢（きんきんせんせいえいがのゆめ）』が契機となって、大人向けの小説になった。

黄表紙の特色は今の漫画と同じである（劇画に似ている）。絵が中心で、登場人物のせりふが書かれ（吹き出しこそないが）、ト書きにあたる詞書が入る。



以後、春町の他、<sup>ほうせいどう きさんじ</sup> 朋誠堂喜三二のような武士の作家、町人出身の山東京伝＝<sup>まさのぶ</sup> 北尾政演などが続き、さらに曲亭馬琴、十返舎一九、式亭三馬などの作家が競って作品を書いた。

鳥居清長、北尾<sup>しげまさ</sup>重政、喜多川歌麿、歌川<sup>うろこがた</sup>豊国といった画家も育った。

売り出したのは、古浄瑠璃本を出してきた鱗形屋が最初で、いくつもの地本屋が進出してきた。その中で飛び抜けたのが蔦屋重三郎である。蔦屋はさまざまな草紙を創意工夫で出し、さらに浮世絵師に描かせた錦絵でも新境地を拓いた。

格の低い草紙屋だが、売れ行きは大きかったのだ。こういう本を草双紙ともいった。

### リテラシーの向上と大衆本

草紙がよく売れたのは、文字が読める能力のある者（リテラシー）が一段と増えたからである。それを担ったのはまったく民間の力である。いわゆる寺子屋（読み書きの師匠）である。これで、武士は100%、町人・農民でも江戸時代後期 1800 年頃には 50、60 %は、読めたといわれる。そういう層にとってわかりやすいように、かつ、楽しめるように趣向をこらしたのである。特に絵に力を入れた。たんなる情景の描写でなく、そこに絵解きのおもしろさを加えたのだ。

### 中間的読者層

黄表紙や洒落本の成功は、さらに程度をあげた読み物の発刊をうながした。地本屋ばかりでなく、〈本〉を売る書物屋も進出してきたのだ。そのジャンルに<sup>よみほん</sup> 読本がある。→馬琴の読本『昔語質屋庫』絵は挿絵程度となり、読ませる要素を高めた。こういう本が売れるのは、リテラシーだけでなく、程度の高い読者層が増大したことを示す。これを最近では「中間的読者層」などという。この層の厚さが、現代日本にもある。

それを広げたのが貸本屋の役割。1800 年頃には江戸に 600 軒以上あったことが確認されている。風呂敷に本を包んで行商をした。これなら安く本が読める。

### 歌舞伎の人気と合巻

黄表紙は文化 3 年(1806)に姿を変える。それまで安くすることに力点がおかれ、長くても 3 巻 15 丁（せいぜい 30 頁）で完結していたが、その長さの制限を取り払い、人気があれば、続編、続々編と繰り返すタイプになる。それで、合巻と呼ぶようになった。

その頃、浄瑠璃はすたれはじめ、歌舞伎がすっかり庶民の演劇の中心となった。人形より生身の俳優に人気が集まるし、書き下ろしの作品が次から生まれていた。

合巻はその人気に相乗りした。お互いにコラボで連携した。草紙が演劇と深い関係にある中世以来の流れである。→合巻『犬の草紙』八犬伝のパロディ。そもそも水滸伝のパロディ。人気が出たので全 54 巻 107 冊になった。表紙の絵は歌舞伎の動作で描いてある

漫画の源流は平安時代の絵巻にさかのぼり、それが中世の芸能に生き、江戸時代には草紙と演劇にはぐくまれてきた。むしろ明治・大正期にいったん退潮し、昭和の戦後に生き返った。そこに脈々と流れる日本人の感性が見て取れる。

